

## □ ピアノ

## 真 嶋 雄 大

2018年のトピックスは何といってもドビュッシー没後100年。ピアノ音楽に革新的な手法を持ち込んだ作曲家だけに、関わるメモリアル・コンサートやCDや書籍のリリース、またイベントなどが数多く開かれた。コンサートでは、青柳いづみこがドビュッシーの命日の前日に書簡の朗読をも含めた公演を実施、書籍「ドビュッシー ピアノ曲の秘密」を上梓、M.ダルトベルトやP.ロジェをはじめとする内外のピアニストたちもこぞってドビュッシーを採り上げた。菊地裕介は6時間をかけたドビュッシーのピアノ曲全曲リサイタルを敢行、京都コンサートホールでの「光と色彩の作曲家ドビュッシー」も極めて興味深いシリーズとなった。またP.ドゥヴァイヨンらがドビュッシーに関わる公開講座を開講、ドビュッシーのみならず、ラヴェルやフォーレなど周辺作曲家にも大いに光が当てられた一年となった。

来日ピアニストたちも相変わらず盛況。常連組であるG.オピッツはツィクルス「シューマン×ブラームス」を、P.レーゼはドビュッシーやフランクを採り上げ、新たな一面を見せた。また昨年来日50周年を迎えたE.ハイドシュックは、オール・モーツァルトのピアノ協奏曲の第2楽章ばかりを集めたユニークなコンサートで、K.リフシッツは「東京・春・音楽祭」関連も含み、J.S.バッハの「バルティータ」、「イギリス組曲」、「フランス組曲」の各々全曲演奏に加え、弾き振りで「ピアノ協奏曲」全曲演奏に挑み、見事な感興を紡いだ。また9月にはA.ガヴリリョクが、一夜でチャイコフスキー、プロコフィエフ、ラフマニノフの協奏曲を雄弁に演奏して喝采を浴びた。一方ポーリーニやキーンシンの来日公演では充実した内容ではあったが、ともに予定していたベートーヴェン「ハンマークラヴィーア」を変更するなど期待を一部削いだもののデュバルク、ゲニューシヤスなど若手の著しい成長も印象的だった。

もちろん日本人ピアニストも充実の一年。演奏活動の周年では、杉谷昭子が50周年でソロとシューベルト「鱈」などを、斎藤雅広は40周年でフランク等を収録したCD「ナゼルの夜」をリリース、斎藤と東京藝大附高での同級生中井正子は日本人初のドビュッシー全曲演奏者であるが、40周年リサイタルとして新たにドビュッシーに取り組んだ。同じく古楽器系の渡邊順生も40周年でJ.S.バッハのチェンバロ協奏曲全曲演奏を敢行、30周年を迎えた仲道郁代は、ベートーヴェン没後200周年の2027年に向けて「仲道郁代 Road to 2027 プロジェクト」をスタートさせた。

ベテラン勢も元気。内田光子はシューベルトのピアノ・ソナタを3曲ずつ、二夜にわたって演奏、田崎悦子は「三大作曲家の遺言」シリーズを展開、伊藤恵はベートーヴェンを主軸とした新シリーズ「春をはこぶコンサート・ふたたび」を開始、また12年間24回のリサイタル・シリーズを完結させた小山実稚恵は、そのシリーズで演奏した全123曲から6曲を選んでアンコール公演に臨んだ。さらに左手のピアニストとして一時代を築いた館野泉は、フィンランド・日本国交樹立100周年を迎えるにあたり、「フィンランド親善大使」に就任している。

対する若手たちも負けてはいない。日本人初のモーツァルト国際コンクールの覇者菊池洋子は、兵庫と前橋でモーツァルトのソナタ全曲演奏会を開催、河村尚子はベートーヴェン・ピアノ・ソナタ・ツィクルスを、小菅優は火、風、水、土という四大元素をテーマとしたリサイタルシリーズを、上野優子は6回からなるプロコフィエフのピアノ・ソナタ全曲演奏会で、すべ

てメーカーの異なるピアノを使用、松本和将は全5回となる「ロシア名曲選～レクチャー&コンサート」を始動させた。また日本テレマン協会創立55周年年特別演奏会において、高田泰治がともにオリジナルのフォルテピアノ、イルムラーとエラールで延原武春指揮テレマン室内管と共演、またある程度年代に幅はあるが、藤田真央、高橋聖、久末航、岡田奏、富永愛子、入江一雄、福岡洗太郎、萩原麻未、辻井伸行、反田恭平、小林愛実、松田華音、黒岩航紀、入川舜、佐藤彦大、金子三勇士、中野翔太、そして坂田知樹ら若手ピアニストの活躍も目立った。

さて音楽祭に目を移すと、別府アルゲリッチ音楽祭が20周年を迎え、本拠地である別府、大分の他に、アルゲリッチが東京でミョンフン指揮桐朋学園オーケとプロコフィエフ「ピアノ協奏曲第3番」、水戸では水戸室内管とシオスタコーヴィチ「ピアノ協奏曲第1番」を共演、今年のテーマ「前奏曲」とした第9回「シヨパン・フェスティバル」は、D.ヨッフエなどが登場、フォルテピアノ奏者の小倉貴久子が「第1回フォルテピアノ・アカデミー SACL A」を開講、7台の古楽器を集めたアカデミーは日本初。

2018年はコンクールも盛況だった。3年に一度のリーズ国際ピアノ・コンクールは、創設者のF.ウォーターマンが退き、P.ルイスを後任に迎えたが、第1位にE.ルー、第2位にM.ヘリング。同じく3年に一度の第10回浜松国際ピアノコンクールは、今回から小川典子が審査委員長に就任、第1位にJ.チャクムル、第2位に牛田智大、第3位にイ・ヒョク、第4位に今田篤、第5位に務川慧悟、第6位に安並貴史。ノルウェーで行われた第16回グリーグ国際ピアノコンクールでは、高木竜馬が第1位を獲得、モスクワでの第1回若いピアニストのためのラフマニノフ国際ピアノコンクールでも第1位に三好朝香、また中々第1位を出さないミュンヘン国際音楽コンクールのピアノ三重奏部門で、「葵トリオ（秋元孝介P、小川響子Vn、伊東裕Vc）が日本の団体として初優勝を飾った

続いては、各ピアノメーカーの話題。まずヤマハは、通常のアコースティックピアノに独自の消音機能を付加した「サイレントピアノ」と、アコースティックピアノの響板で電子音源を発生して自然な響きを可能にしたテクノロジーを搭載した「トランスアコースティックピアノ」のラインナップを一新、ペーゼンドルファー・インベリアル音色を追加し、豊かな響きを実現した。河合楽器製作所では、ハイブリッドアップライトピアノ「AURES」と消音機能付きの「ATX3」、また自由設計の防音室を発表、創立90周年を記念して創設されたシゲル・カワイ国際ピアノ・コンクールを8月に開催、第1位にA.シチコ、第2位にN.マヴリユドフ、第3位に伊舟城歩生。

スタインウェイでは、80年ぶりとなる新型ピアノ「SPIRO / スピリオ」を発表、これまでの自動演奏ピアノの概念を超え、ジャンルを超えたピアニストたちの3千曲もの演奏がハイレゾリューションシステムで再現され、今後も無料で追加される。また第4回スタインウェイ・コンクールの本選が行われ、大賞を得た八木大輔がハンブルクでのフェスティバルに参加。ペーゼンドルファー・ジャパンでは、没後100周年を記念した全世界25台限定のクリムトモデル、シェンブルン宮殿の庭園をモチーフとする象嵌技術を用いたモデル「ドラゴン・フライ（全世界18台限定）」をリリースした。さらに筆者とI.メジューエフ、三輪郁、高橋多佳子などが繰り広げる年4回の「美女と野獣のトーク・コンサート」シリーズもスタート、好評を得ている。そしてベビシュタインを扱う(株)ユーロピアノは(株)ベビシュタイン・ジャパンと社名変更、全世界165台限定A.114 Modernの165周年記念モデルを発表、消音システム「ヴァリオ・システム」を搭載したベビシュタイン・アカデミーシリーズにも力を入れる。さらに第2回ノアン・フェスティバル・シヨパン・ピアノ・コンクール（審査委員長：イヴ・アンリ）を汐留ベビシュタイン・サロンで開催、多くの若手を発掘している。